

**地域環境学：**

「現実の意志決定プロセスにおいて、外来の科学知は地域に固有の状況のもとで、多様なステークホルダーに受け入れられやすいように変形され、取捨選択され、土着的地域体系の中に取り込まれて初めて、合計形成の基盤として有効に機能するものと考えられる」（佐藤 2008:6）

「専門家が知識の環境問題の解決に役立つ知識を生産するとき、その知識を実際の現場で活用するのは、地域のステークホルダーである。知識は地域のステークホルダーによって受け入れられ、活用されるプロセスを通じて、その有効性がたえずテストされることになる。その際には、知識の一般性、普遍性、科学的価値といった従来のアカデミズムにおける評価基準と異なり、地域に固有の問題構造に即して、多様なステークホルダーによって受け入れ可能であるか、地域に固有の伝統と文化に根ざした意志決定システムと整合しているか、そして、最終的に地域社会の中で活用可能であるかという、問題解決に直結した評価がなされる。そして地域社会の現場において多様なステークホルダーとの相互作用の中でこのようなフィードバックを受けることによって、科学者コミュニティが地域社会の現実に即した問題解決に貢献する研究を行う方向へと変容していく」（佐藤 2008:6）

**知識：**

【アカデミズム（近代科学）／民際学、地元学、民間学】

●「民際学」＜家中 2005:16、家中 2006:12＞

「経済学以外の社会科学も、ニュートンの方法を採用することによって、人びとの価値体系から自由な、客観的な研究ができることみなしてきた。専門家にとって都合なことには、社会問題の研究にあたって、研究者が何者であるか、どのような生活経験を持つか、いかなる社会活動に参加しているか、問う必要も問われる根拠もなくなった。この方法に立てば、研究の主体と研究の対象とが互いに何の関係も持たない状態こそが、既存の価値観に束縛されない、すぐれた研究成果を生み出す前提であるとされる。／当事者の参加を認めない方法には、表面的な観察しかできないという限界がある。それを克服するには、専門の細分化を進めるほかない」（中村 1994:196）

●水俣の経験から → 「地元学」／「水俣学」＜家中 2005:9、原田 2005（新崎・比嘉・家中 2005:32-51）＞

「地元学は、郷土史のようにただ調べるだけのものではない。地元学とは、地元の人が主体になって、地元を客観的に、よその人の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することから始まり、外からのいや応のない変化を受け止め、または内発的に地域の個性に照らし合わせたり、自問自答しながら考え、地域独自の生活（文化）を日常的に創りあげていく知的創造行為だということである」（吉本 1995:118）

「地元で学ぶ地元学」「ないもの探しからあるもの探しへ」「調べた者しか詳しくならない」

●民間学

『民間学事典』「刊行の言葉」（鹿野・鶴見・中山 1997: i-iii） <家中 2005:12>

「明治にあった思いこみは、海外にすぐれた学問の体系があって、それを早く学習し応用するということがあった。明治以前の学問とのつながりは、かくしてそこで断ちきられた。その切断は、前時代との切断だけでなく、学問になう個人の過去・未来にもおよぶ。人は生まれてくるやいなや問題に投げ込まれ、問題を背負わされ、問題を探りあてようとし、問題と取り組む」

「私たちが生きていること、やがて死を迎えるなかに自分の問題を探しあててを学問のひとつの道と認めるならば、そこに育つ学問は民間学である。どんな官吏も 24 時間官吏であるわけではなく、1 日の多くの時間、彼は民間人であり、自分として過ごすからだ。そう考えるならば、100 パーセントの官学は、それをになう当人の暮らしからはみだしている」

『民間学』という言葉は、鹿野政直がその著書の題名にはじめて使った。それまでに『民間史学』という言葉はあったが、鹿野は、その考え方を史学よりも広くとり、柳田国男らの民俗学、柳宗悦らの民芸研究、今和次郎の考現学にあらわれた共通の学風としてとらえた」

「明治から平成の現在まで、日本の学問が主として官学として発達し、その故に大きな成果をあげたことは事実である。その学問は、良い手本を海外でみつけ、それに最短期・最有効の方法で近づくことを特色としていた。民間学はおなじ期間、官学にくらべて、業績としては小さいなりに、並行して続いてきた、その持続の意味をとらえ直したい。そのとき、民間学が文明開花によって顧みられなくなった明治以前の学問の流れとつながりをもつこともあきらかになろう」

●生活者のプラグマティズム <家中 2005:17、26/家中 2005:22>

### 主体：

【よそ者（論）/越境する多重的多元的媒介者/近代的個人・公共性批判】<家中 2006:16、47、51-52>/家中 2006:17-18、22>

「民際学は、それゆえ、ニュートン以来の古典物理学をお手本とする社会科学に対して、別の道を考える。生身の人間は、自己の社会生活とそれを観察している自己を、明瞭に分離できない。誰もが社会活動の当事者であると同時に、社会活動のあり方について反省し、分析を加える人間でもある。/専門をもたない人間は、観察対象と観測者をあわせもって、社会活動を営んでいきている。それが「当事者性」と呼ぶものである。当事者というのは、行為の対象と行為する主体の双方にまたがる存在である」（中村 1995:198）

### 対象・方法：

【複雑性、リスク、シンプリフィケーション/市民調査（住民調査、サイエンスショップ、住民参加型開発）】<家中 2005:20-21、28>

### （参考）

ミドルマンのすすめ <高坂 2000>

1 割の科学的論拠と 9 割の科学的推論（経験的直感）/科学知と生活知 <鳥越 2004>

日常的な知識＝体験知、生活常識、通俗道徳/言い分、説得と納得の言説 <鳥越 1997、松田 1989>

### ステークホルダーの紹介：

慶良間海域保全連合 → 家中 2007、(2009b) 正統性、社会関係のなかの資源（自然の資源化）

恩納村漁協 → 家中 2000、(2009b) 地域資源管理、地域計画策定主体（共同占有権）

白保 → 家中 2001、2007、(2009a) 漁業権制度、コモンズ、地元の同意

### 文献

鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂編, 1997, 『民間学事典』三省堂

高坂健次, 2000, 「ミドルマンのすすめ—『役に立つ』社会学ノート(1)—」関西学院大学社会学部紀要 87:197-206

鳥越皓之, 1989, 「経験と生活環境主義」鳥越皓之編『環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から』御茶の水書房

, 2004, 『環境社会学—生活者の立場から考える』東京大学出版

松田素二, 1989, 鳥越皓之編『環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から』御茶の水書房

中村尚司, 1995, 『人びとのアジア』岩波書店

吉本哲郎, 1995, 『わたしの地元学』NEC クリエイティブ